



Title	下顎前突者の顎顔面頭蓋形態の年令的推移に関するX線計測学的研究
Author(s)	須佐美, 隆三
Citation	大阪大学, 1968, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29877
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	須佐美隆三
学位の種類	歯学博士
学位記番号	第 1483 号
学位授与の日付	昭和 43 年 4 月 10 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	下顎前突者の顎顔面頭蓋形態の年令的推移に関する X 線計測学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 滝本 和男 (副査) 教授 西嶋庄次郎 教授 川勝 賢作

論 文 内 容 の 要 旨

下顎前突は日本人に特に数多くみられる不正咬合で、その歯科矯正治療に当つては、患者の治療開始時の年齢が、治療方針決定の 1 つの重要な指針となり、また治療予後の良否に重要な関係がある。したがって下顎前突者の年齢と、その年齢に伴つて推移する顎顔面頭蓋形態との関連を的確に把握することが、歯科矯正臨床の立場から強く要望されている。

従来幾多発表されている下顎前突の形態学的研究の大部分は、研究対象の年齢差を考慮せず一括処理してその全般的な形態特徴を追求したものであり、下顎前突者の顎顔面頭蓋の成長に伴う形態推移の過程を解明したものではない。

本研究は頭部 X 線規格写真法により、咬合発育段階 II C (平均年齢 6 年) より成人にいたる間の、下顎前突者の顎顔面頭蓋形態の年齢的推移を解明、把握しようとしたもので、研究資料として、日本下顎前突者、男子 179 名、女子 230 名、対照として正常咬合者および上下前歯被蓋関係の正常な Angle Class I 不正咬合者、男子 186 名、女子 188 名からえた頭部 X 線規格写真 (側面) を用いた。

上述の各資料からえた透写図上で、著者の設定した 52 項目について計測を行ない、下顎前突者群男子、同女子、対照群男子、同女子各グループの、II C, III A, III B, III C, IV A, Adult の 6 咬合発育段階ごとに、52 計測項目の計測平均値、標準偏差、標準誤差を求め、下記の検討を行なった。

- 1) 各グループについて、各計測項目計測平均値にみられる年齢的変動を、各段階群間計測平均値の差の有意性の検定を行なってより明確にし、かつ各段階群の profilogram を作図しそれらを同一座標上に重ね合わせて、下顎前突者男女、対照群男女の顎顔面頭蓋成長を把握した。
- 2) 各段階群内における性差を統計処理を施して比較し、男女間にみられる下顎前突者の顎顔面頭蓋の成長型ないし成長時期の差異を明らかにした。
- 3) 下顎前突者群と対照群の各計測項目計測平均値を各段階群ごとに比較検討し、下顎前突者の顎顔

面頭蓋形態の特異性を把握した。

研究成果の概要は次のとおりである。

- 1) 下顎前突者のⅢA(平均年齢8年)以下の若年者には上顎部の劣成長ないし後退が認められ、さらにⅢB(9.7年)以後成人にいたるまでこの傾向は続いている。
- 2) 下顎前突者のオトガイ部は男女とも、ⅡC—ⅢA間(6—8年)はほとんど前後的な変化を示さないが、ⅢA—ⅢB間(8—9.7年)には顕著に前進する。またⅢB—ⅢC間(9.7—11.5年)では下方への移動が主体となっているが、女子ではⅢC—ⅣA間(11.5—13.2年)に、男子ではⅣA(13.8年)以後オトガイ部はさらに前進し、下顎前突者の顎態はより prognathic となる。このような下顎前突者のオトガイ部の前後的な位置の変化は、成長促進と停滞の時期が交錯する下顎骨の成長過程を反映したものであり、対照群と比較した場合、下顎前突者の下顎骨は過成長の傾向を示している。
- 3) しかし、下顎前突の形態的特徴として一般にあげられている gonial angle および下顎下縁平面傾斜角の開大はいずれの段階群においても認められず、個体間変動として示されているにすぎない。
- 4) オトガイ部の位置の変化に一致して、下顎前突者の上下顎骨間関係はⅢB(9.7)年において、それまでの Heath らのいう skeletal I の関係から skeletal III の関係に移行し、その後も成人にいたるまで下顎前突者の skeletal III の関係は増悪する。
- 5) 一方歯列弓においては、下顎オトガイ部の前進する時期、ⅢA—ⅢB間(8—9.7年)およびⅢC—ⅣA間(11.5—13年)に上顎中切歯が唇側傾斜度を増し、下顎中切歯がその傾斜度を減じて舌側傾斜を来たしている。

以上の研究成果から、下顎前突者の顎態が増齢的に増悪して、年齢的な差が歯科矯正治療の難易を左右する要因となることが考えられる。

論文の審査結果の要旨

本研究は、下顎前突者顎顔面頭蓋の成長に伴う形態推移の過程について研究したもので、従来ほとんど行なわれなかつたその年令と形態推移との関連について、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よつて、本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。